





僻齋集



僻業集

古今歌



神初きて嬉いし水乃らむと  
こふらりてはわらへし

初きてはひさしきと  
と無音の人そのまはか  
みはるくはたはた  
あふまわらば世のまは  
こふはゆめをさす

春とては花とわらへし  
しらたけりてはるを

あはれはみまはる  
あはれはみまはる  
あはれはみまはる

あはれはみまはる  
あはれはみまはる  
あはれはみまはる















いふ世のしつたてい書あふふ  
つれもなきたふまうたれ  
つれもなきそふあつてい

こゝろ

物<sup>な</sup>あつていふにゆいあはれい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい  
あつていふあつてい

あつていふあつてい























































これよりやいふらへぬくし四字儘讀  
よみ字也(也)也自篇之詞也類毛也  
玉篇シテ信也シテ能也又類之毛也  
物者部

木の名は伐るにさへさへはれり  
のさへはれ者こそあはれらるる也  
木ありこくしんも

古字

おごいさちまはりてはたてなま  
てはるいおまのまもさあのぬら  
うけいし梅也一字むらと  
てはつらむささるし物はみ  
くさるるも木は枝たれやあつら  
らしてやまわけて物語襟子の視  
宣旨はつらむらこもさるの  
女のみはらひふらふはたて人  
事ゆかひさるるはるるもさるる

魚鱗ハ一ニ列ガ

めでにもはるる花ささるら

若自めらるる魚物の名も草杜類也  
右近き湯乃をよりの目

まゆら平結もはるるはるる  
福とひきちかるとさるとさると  
いしなるるもさるるはるる  
まゆらささるるはるるはるる  
下りつ事一も平結とさるる  
さるるはるるはるるはるる

人者 穴龍

おのろはるるはるるはるるはるる  
さるるはるるはるるはるるはるる  
それとさるるはるるはるるはるる  
太長うはるるはるるはるるはるる  
さるる物ありはるるはるるはるる  
やとさるるはるるはるるはるる











こころのつらさ

ゆきうらやまのこころのつらさ  
うけてるなほのつらさ  
やうにうらやまのつらさ  
よみかきかきかきかきかきかき  
は川にうらやまのつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ

こころのつらさ  
日の暮とや旅とをわかれ  
こころのつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ

つらさ

家のつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ

つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ

つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ

つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ  
つらさつらさつらさつらさつらさ











ふらふらあつてはなを平に遠  
く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く

あつてはなを平に遠く











あつて海本とくろの事いふら  
老後安船之次岡梶取男諸の  
向ふまは総らうこそり<sup>下</sup>路<sup>上</sup>向之答  
云ふの済る舟と敷総を申也雖非  
此等事依岡及位之

とらうるま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
向ふ<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
の<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
の<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

浦嶋子<sup>浦嶋子</sup>在葛葉<sup>葛葉</sup>集<sup>集</sup>事<sup>事</sup>舊<sup>舊</sup>高<sup>高</sup>卑<sup>卑</sup>  
思<sup>思</sup>や<sup>や</sup>思<sup>思</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>

こま<sup>こ</sup>い<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>こ<sup>こ</sup>三<sup>三</sup>位<sup>位</sup>祀<sup>祀</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
祀<sup>祀</sup>の<sup>の</sup>位<sup>位</sup>より<sup>より</sup>三<sup>三</sup>位<sup>位</sup>同<sup>同</sup>也<sup>也</sup>四<sup>四</sup>位<sup>位</sup>紫<sup>紫</sup>九<sup>九</sup>位<sup>位</sup>御<sup>御</sup>  
六<sup>六</sup>位<sup>位</sup>紫<sup>紫</sup>六<sup>六</sup>位<sup>位</sup>御<sup>御</sup>九<sup>九</sup>位<sup>位</sup>之<sup>之</sup>時<sup>時</sup>着<sup>着</sup>衣<sup>衣</sup>藤<sup>藤</sup>  
人<sup>人</sup>祀<sup>祀</sup>六<sup>六</sup>位<sup>位</sup>御<sup>御</sup>六<sup>六</sup>位<sup>位</sup>之<sup>之</sup>時<sup>時</sup>着<sup>着</sup>衣<sup>衣</sup>藤<sup>藤</sup>  
四<sup>四</sup>位<sup>位</sup>御<sup>御</sup>三<sup>三</sup>位<sup>位</sup>着<sup>着</sup>衣<sup>衣</sup>藤<sup>藤</sup>廣<sup>廣</sup>明<sup>明</sup>御<sup>御</sup>奉<sup>奉</sup>議<sup>議</sup>  
正<sup>正</sup>四<sup>四</sup>位<sup>位</sup>下<sup>下</sup>在<sup>在</sup>大<sup>大</sup>井<sup>井</sup>天<sup>天</sup>曆<sup>曆</sup>九<sup>九</sup>年<sup>年</sup>二<sup>二</sup>月<sup>月</sup>任<sup>任</sup>  
權<sup>權</sup>中<sup>中</sup>御<sup>御</sup>衣<sup>衣</sup>御<sup>御</sup>後<sup>後</sup>三<sup>三</sup>位<sup>位</sup>于<sup>于</sup>時<sup>時</sup>九<sup>九</sup>條<sup>條</sup>殿<sup>殿</sup>右<sup>右</sup>  
大臣<sup>大臣</sup>右<sup>右</sup>近<sup>近</sup>左<sup>左</sup>將<sup>將</sup>祀<sup>祀</sup>と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
今<sup>今</sup>の<sup>の</sup>世<sup>世</sup>に<sup>に</sup>四<sup>四</sup>位<sup>位</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
御<sup>御</sup>三<sup>三</sup>位<sup>位</sup>着<sup>着</sup>衣<sup>衣</sup>藤<sup>藤</sup>之<sup>之</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
之<sup>之</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>

あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>衣</sup>を<sup>を</sup>



除右の如くいふ事也河社  
ふら事おいら籠也

えんじとていふ事此也いふ事とてい  
ふ事いふ事とていふ事

北野よりいふ事とていふ事延喜十  
七年同十月十七日約年山野二時

枇杷大長中御言書事又左兵衛  
督又字誤云いふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
不書とていふ事とていふ事

也この此の如くいふ事神法約年  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

ニヤコウナキ

中人の物いふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事

いふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事







人うとハ彼家へ嫡女書流りたれ  
これハくわく證平と信伴に

拾遺

池田屋へ寄つて海つと志うす  
りつ家合のよき事なり

こらうしつこののひさくすと  
志願のしつれうあつとさう初也相  
霧合天霧之らと所志ゆ也

春の野々ゆふとさのほりらひま  
をのうりうことよまされ

あまのいそ中つとに物とさう  
なごきれはとせしはこう

横らとむいふとまうく  
あつとさうさうあつとさう

はらうらとさうあつとさう  
こととあつとさうあつとさう

よりあつとさうあつとさう  
あつとさうあつとさう

あつとさうあつとさう



あきけの風はたもくしきく

あきけの事とちりりてつたこ  
るをまきとる羽々の合書とつて

これにあいぬきも凡あつていりて  
つたことあつてまきとるあきけ

七文字にこのあきけとくくつたこと  
からくつりてきいもつあきけ

集にあきけとる塩橋とまきとる  
あきけのあきけとるあきけ

くつりてあきけとるあきけのあきけ  
あきけとるあきけとるあきけ

あきけとるあきけとるあきけとる  
あきけとるあきけとるあきけ

あきけとるあきけとるあきけとる  
あきけとるあきけとるあきけ

あきけとるあきけとるあきけとる  
あきけとるあきけとるあきけ

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

あきけとるあきけとるあきけとる

物名部

あきけとるあきけとるあきけとる







篇一 一とて二箇をくらひしめはけり  
柘大齋のつとこくし聖代治世はこれ  
こまろ物言れをそ天平延暦  
私作すわらめてさるる美味し  
菊の香はほきたるに不書あつたや  
万葉集よそもほつた初めを公習く  
み抱えうたつてころそふいよこゆり所  
やうそそまてくそふいよこゆり事と  
そそつてあつかのみをさうくゆり地の  
じふとふいよこゆりすすし南  
のそりてりこくみ抱えうたつてふいよ  
きこゆりつとふいよこゆり事と  
そそつてあつかのみをさうくゆり地の  
じふとふいよこゆりすすし南  
のそりてりこくみ抱えうたつてふいよ  
きこゆりつとふいよこゆり事と  
そそつてあつかのみをさうくゆり地の  
じふとふいよこゆりすすし南  
のそりてりこくみ抱えうたつてふいよ  
きこゆりつとふいよこゆり事と

海くの帯瀬水はみかいたるうれん  
これとつとふいよこゆり

萬葉六

お愛もきこゆりつとふいよこゆり事と  
かたねはうらなもあつたふいよこゆり事と  
あはれつとふいよこゆり事と  
そそつてあつかのみをさうくゆり地の  
じふとふいよこゆりすすし南  
のそりてりこくみ抱えうたつてふいよ  
きこゆりつとふいよこゆり事と  
そそつてあつかのみをさうくゆり地の  
じふとふいよこゆりすすし南  
のそりてりこくみ抱えうたつてふいよ  
きこゆりつとふいよこゆり事と

一 性年治養之既古今後撰集受註訓之  
傳年序已久難悉先達古取員  
之前注後代之所見非其失  
况依耶管見見誤說故不載後業  
今迫老及之期餘喘之盡二十



愚老之没後為散遺疏之書味柚  
家要而密之所深筆也更莫不令  
他見

嘉祿二年八月 戶部尚書 在列

一平男在之  
追注付三代集事 永正二年仲秋七日御本見合之案  
方在し此言所云別人言分一説也

かや

巨父御誅并 頭將資盛朝臣并合題之月由

一書左 右大物

青白よむはさるるれ何柳

いさくは浪や嵐のささる

右 入道釋

ささるる平向とささると川原ら

いふふ衣とささるる同ささる

判入道

右のこの河社の事しんさるるふり

はる事さるるさるるは夏神樂

とさ事さるるさるるさるるさる

いづてい夏さるるさるる但愚老所

誅さるるさるるさるるさるる

ゆささるるさるるさるるさるる

この事いづり伊れさるる河柳

さるるさるる

左大将家三百書る合建之當年 題書さる

左 銅胎

さるるさるるさるるさるるはやし海

さるるさるるさるるさるるさるる

右 家隆

いささるる夜中さるるさるるさるる

はるるさるるさるるさるるさるる

右の申云志のよさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるる

云これさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるる

いささるるさるるさるるさるる



より何れ是と河社と云也なる此  
簿のせり件神文の祈禱の事  
すの事也は此の事と云  
て之れをわきまぬる事  
らなるやそれと意衣の事  
思ふ也

左申云右の各指事

判入道

左意衣と河社と云也なる此  
簿のせり件神文の祈禱の事  
すの事也は此の事と云  
て之れをわきまぬる事  
らなるやそれと意衣の事  
思ふ也

御長うまにたれ物まはれ社  
之れは御まはれ社  
此の事と云はれ  
すの事也は此の事  
と云て之れをわき  
まぬる事らなるや  
それと意衣の事  
思ふ也







川をりたれとみえりといふ  
浪の三つの中は一つは  
いふ所のこのちうり

皮骨之集ニそとけははたは  
け事作平文の不善のゆゑに  
けきえんりみえり  
り秘秘り事之不可知

一 一のやりとるいふは  
け事一忠見六百番う合

一 鄭云の二四八の事

古文読ける在萬葉集之ゆゑ  
有説忌江實也所詮を證據  
也不可用之中古の虚言  
事候

<sup>十</sup>年三  
此草紙付之後拾遺相云一人之外更

不令化見と十嘉頼  
果意好之論之遂付揚音北之奇

文應元年二月之比賜此秘書け出是  
故京極禪師白抄秘々中秘去也  
書之為研群見端々不可見之  
吹け自書老眼遮延延銘  
幼稚之昔至衰老之今好此道  
經廿余回之春秋自生年十六歲  
于續書九十六歳行積年秘有古  
目是是言け行錄報其念力  
明加冥助佛陀密加讚可良守  
後亞為強門未子可傳之者也不  
他欲故也昔若山林流浪之修  
論伽秘志之學者今老故東西



之老比丘念佛不退之行人也

法印大和高位良守

折亞相祥口雖為不堪之身已於勒  
續後撰一首被書入并志云以今之  
淑力難報之其故亦下今後撰不  
文案據被奉校剽賜以事寶庶  
却多生之宿緣故不知又世之生  
恩愛不可報可謝奉但三靈思  
覽者也

壬午年九月廿九日書寫之

平云  
正應二季九月廿九日書寫之  
什初地者三代集之據者民部卿入道  
婦之相乘之平也兄弟骨肉相以  
不被先被說况他人亦而先年後  
室号阿佛之席并同服之子息相与

婦子為民部卿也其相海之事依之說  
中院亞相欲達上同即彼亞相以道  
理之可用及致為上同為附此恩後世  
事相一見之間隨不以被為允許  
時之間可書寫也中院羽林軒依有  
厚功之事相于不隔續者然同  
背乞請可書寫也云為被家  
云為我道勞之可慎他見者也

同十月八日一文平 判

平云  
文明才之曆所陽孟夏下旬假書寫并  
大悅判

以右平長字之平字仲德  
下流之候之平字授合院



秘藏、一秘藏出圖不  
可也  
仙源

文錦三年七月十一日書之

右中村松丸  
書







